

製作をねらいとした園行事と子どもを中心にした保護者の保育参加 ～認定こども園・Y 園の保育実践と造形表現の考察～

A Study of Kindergarten Events Aimed at Crafting and Participation
in Childcare by Parents Focusing on Their Children:
A Study of Childcare Practices and Childcare Content Area Expression (Art)
at Certified Childcare Facility Y

久保木 健夫

Takeo KUBOKI

千葉県の認定こども園・Y 園の製作をねらいとした園行事・お店屋さんごっこに 2023 年 8～12 月に参加した保育実践研究である。子どもと保育者、保育に参加する保護者に焦点を当て、保育実践と指導計画（内容別部分指導案等）の関係性及び子育て支援について考察する。造形表現に関わる保育内容と指導法の充実と蓄積を図り、保育者養成と教育・保育の質の向上及び貢献に目的がある。絵本等の教材や環境を介在させる点に特色がある。

キーワード：造形表現（領域表現） 絵本等の教材と環境 保育内容指導法 保育者養成 子育て支援

1. はじめに ～本論の目的～

本論は千葉県にある認定こども園・Y 園で実施させていただいた保育実践研究における考察である。Y 園の製作をねらいとした園行事「お店屋さんごっこ」を軸にして 2023 年 8 月～12 月にかけて保育に参加させていただいた。Y 園の製作をねらいとした園行事・お店屋さんごっこは、園生活の中で無理なく一体的に展開している保育実践である。本論では、Y 園の園生活と製作をねらいとした園行事・お店屋さんごっこを通して育つ子どもの姿と、園の保育や行事に関わる保護者の存在、そしてそれを支える園と保育者（保育教諭）に焦点を当てて考察を行っている。Y 園の保育実践を手がかりにして、子どもと保育者の関わりや、園が行う子育て支援と造形表現について、その一つのあり方を明らかにする。そして、保育実践と内容別部分指導案を含む指導計画の関係性について考察し、造形表現に関する保育及び指導法の課題と可能性についても考察を試みている。

本研究は保育内容としての造形表現（領域表現）に関わる内容と指導法の一層の充実と蓄積を図り、保育者養成および教育・保育の質の向上に貢献することを目的としている。また、絵本をはじめとする教材や遊具、環境等を介在させて考察しているところに本研究の特色がある。研究対象は主に幼児教育・保育、初等

教育である。

2. 本研究と先行する研究成果

幼児教育・保育の研究成果は膨大な数のものがあげられる。本研究はそれらの成果のもとに行うものである。その中で、保育実践の中に入って行われた幼児教育・保育における造形表現に関するまとまった研究としては、津守真の研究（1987）⁽¹⁾ があげられる。また、自らが運営する園の園長として保育実践を展開して考察を行った安部富士男の一連の研究（2002 他）⁽²⁾ や、幼児教育・保育における造形表現を美術教育の視点も踏まえて考察した林健造の研究（1987, 1992, 2008）⁽³⁾ 等をあげることができる。本研究はこうした研究成果に学びながら研究を行っている。しかし、幼児教育・保育および初等教育に関する研究の中で、造形表現に関わる研究成果は、他の領域・分野と比較すると非常に希薄な状態である。さらに教育・保育実践に参加し、その中で考察した研究成果は、前述の研究の他には、現在のところ容易にはみつからない状態である。

本研究は、保育実践に参加し、子どもの姿や保護者の存在、園や保育者による実践に基づきながら、幼児教育・保育としての造形表現に関するより良いあり方について考察を行っている。そして、その多様で豊かな保育実践の成果と様々な考察の蓄積を図ることで、

造形表現および保育者養成、幼児教育・保育、初等教育、絵本等の一層の充実と質の向上に貢献することを目的としている。

3. 認定こども園・Y 園

認定こども園・Y 園は千葉県の閑静な住宅街に位置する園である。都市型の園だが周囲には森があり、園舎や園庭の敷地は広くて恵まれた自然環境の中にある。一人一人の子どもを大切にしながら集団による生活や遊びをバランス良く展開することで、園児を健やかに育む、ぬくもりや優しさを感じられる園である。預かり保育や一時保育、育児相談、各種課外教室等も実施し、地域の子育てを支援する拠点にもなっている。

創立 50 年を越える Y 園は、保護者が関わる子育て支援の体制には特に厚みを感じられる。親子遠足や休日参観、保育自由参加、各種園行事、親子鑑賞会、等が年間を通じて実施されている。保護者は、園児の送迎時以外にも、様々な形で園や保育に参加することができる。保護者を対象にした有志の会も存在し、園の中で毎年受け継がれている様子である。Y 園は子ども達の主体性を大切にして、人としての基礎となる部分を、家庭との連携の中で、しっかりと築いていくことを大切にしている。一朝一夕では実現できない確かな実績と保育を兼ね備えた園である。

4. Y 園の製作をねらいとした園行事「お店屋さんごっこ」

(1) Y 園の「お店屋さんごっこ」

Y 園の「お店屋さんごっこ」は全体行事である。Y 園の年間指導計画は 4 期に区分して構成されている。お店屋さんごっこは、主に 10 月～12 月（第 3 期）に、3 歳児・年少組以上の全クラスで取り組む全体行事として位置付けられている。第 3 期の 9 月～10 月にはもう一つ大きな全体行事・運動会が開催される。夏休みが明け、運動会に向けた準備が進み、運動会の開催で一つのピークを迎える。運動会には当然ながら保護者も参加する。運動会の終了後も、しばらくは子ども達の間で運動会ごっこが続いている。それが落ち着いてきた 10 月～12 月頃から、もう一つの全体行事「お店屋さんごっこ」が始まる。

Y 園のお店屋さんごっこは、大きく二つのねらいがある。一つは年間の製作活動の集大成としての意味合いである。様々な素材や用具を使って作る楽しさを味

わいながら、製作技術の獲得を目指している。もう一つは「ごっこ遊び」として、お客さん、店員さんになりきって買い物を楽しむことである。普段の生活の中で目にする様々なお店をヒントにして、保育者と子ども達が対話をしながら、品物（作品）やお店を作り上げていく。出来た品物はさっそく売り買いをして楽しむことになる。品物の売り買いは、普段の園生活の中でお店屋さんごっこの本番当日まで何度も繰り返される。繰り返して遊びを楽しむ中で工夫や試行錯誤を重ねていく。売り買いして楽しんだ品物は、本番当日までは元の場所に毎回戻される。お店屋さんごっこの本番当日は保護者の保育参観日でもある。子ども達と一緒に保護者もお店屋さんごっこを楽しむ親子参加型の参観日となっている。そして本番当日にお店屋さんごっこが行われた後、皆で売り買いされた品物はそのまま各自の家庭に持ち帰ることになる。お店屋さんごっこは年少組から毎年体験する。そのため、最初はよくわからないながら参加していた年少組の子ども達も、自分達が年長組になる頃には、それまでの経験から見通しがつくようになっており、子ども達の方からお店作りを進めるようになっていく。

(2) 1 日の園生活の中での「お店屋さんごっこ」

Y 園のお店屋さんごっこはクラスごとに進められる。筆者は主に 4 歳児・年中組と 5 歳児・年長組に入らせていただいた。お店屋さんごっこは長期の指導計画の中で展開されるが、1 日の園生活のあり方は図 1⁽⁴⁾ の通り、お店屋さんごっこだけに終始するわけではない。

園児の最善の利益を守りながら、一人一人にとって心身ともに健やかに育つためにふさわしい生活の場としての園生活、その中でバランス良く外遊びや好きな遊び、体操遊び、歌、リトミック等をはじめとする毎日の保育内容が総合的に構成されている。Y 園ではお店屋さんごっこは、主に午前 9 時 45 分～午前 11 時 30 分の「その日の活動」の中で展開されている。

朝登園をして、朝の歌、呼名、出席確認、先生（保育者）のお話、お当番の挨拶（お当番のルールの説明）等が続いて、お店屋さんごっこが行われる。基本的には、それまでの取り組みの様子や進捗状況を皆で確認し、共有するところから始まる。クラスや日程にもよるが、お店屋さん会議を開催して、「どんなお店にするか？」「作りたいもの（品物）はどんなものか？」「お店に足りないものは何か？」等について、皆で話し合い、アイディアを出し合いながら、その都度、製作を進めていくところに、お店屋さんごっこの一つの醍醐

時間	1 号認定児（3～5 歳児短時間）		2 号認定児（3～5 歳児長時間）	3 号認定児（1～2 歳児）
7:30		順次登園（朝の〇〇ルーム）		順次登園
8:00				
8:45	登園			

（認定こども園 Y 園「園案内 令和 4 年度」をもとにして本論用に筆者が作成。）

図 1 認定こども園 Y 園の 1 日

味があると考えられる。各クラスのお店の様子を見ると、各保育者や子ども達の想い、考えや取り組みの様子等が、それぞれのクラスなりの形になって現れているように感じられる。

(3) 「お店屋さんごっこ」と Y 園の保育

Y 園は年長組 2 クラス、年中組 2 クラス、年少組 2 クラスの構成である。それぞれクラス担任制で、担任は原則 1 クラス 1 名である。補助保育教諭は、年少組は 1 名ずつ、年中組・年長組は必要に応じて配置される。1・2 歳児クラスは担当制保育であるが、お店屋さ

んごっこへの参加は年少組以上となるので、本論では触れないことになる。ベテラン保育者と中堅保育者、新人保育者がバランス良く各クラスに配置され、さらに全クラスを園長やクラス担任以外のベテラン保育者が必要に応じて臨機応変に入る体制となっている。

Y 園では最初は自分の遊びたい遊びでじっくり遊んでいた子ども達が、集団生活の中で刺激を受けて、自然と人間関係が広がっていくことを大切にしている。やりたい（取り組みたい）遊びの目的を定め、それぞれに自分の思いを主張し、一方でお互いの思いを尊重しながら遊びを進めている。集団の中では衝突もしば

しば起こることも予想される。そうした時も、友達と意見がぶつかった時に、「どこまで自分の思いを主張するのか」「友達の意見と共通するところはないか」「友達の意見の方がうまく進むのではないか」等の試行錯誤を繰り返しながら、「楽しい」という気持ちを持って、遊びの中でくじけることなく衝突を乗り越えていくことができるようになることが目指されている。目的に向かって協力する経験は、子ども達一人ひとりに自立心、自己抑制力を育み、子ども達は他者との関わりの中でバランスを上手にとれるようになる。友達と協力して遊びを作り上げることが、自己の確立につながり、安定した人間関係を築く力の育成にも繋がっている。

(4)「お店屋さんごっこ」の品物づくり

① 年長組

お店屋さんごっこの具体的な活動は「品物づくり」である。年長組は、これまでのお店屋さんごっこの経験がすでにあり、昨年の年長組の様子も見ているので、始めからかなり明確にイメージや思いを持って取り組むことができる。その時々の子どもの様子にもよるが、ベテラン保育者の話では、基本的な取り組みとしては、最初は子ども達が自分でそれぞれ1人一つずつ作りたいものを作ってみることから始める。そして作ったものをお互いに見せ合い、同じもの、似たようなものを、それぞれのお店に分けてグループ化する。自分の（子ども達の）作りたいもの、作ったものをもとにして、保育者はお店に分ける（グループ化する）のである。例えばこの時の年長組は、おもちゃ屋さん、お祭り屋さん、レストラン、ピザ屋さん等に分かれている。

次に各グループ（お店）に分かれて話し合いをする。話し合いによって、自分たちの作りたいもののイメージを共有する。「子ども達同士の話し合いによってもめることは、実際にはあまりない」とベテラン保育者は述べていた。もし仮に自分の作りたいものが作れなかったり、自分の思いが通らなかったりした場合には、その子は他のグループ（お店）に移ることもできる。新たにお店（グループ）を作ることもできる。子どもの姿に応じて柔軟に構成を組み換え、配慮や対応ができるように保育者は考慮していた。

それぞれの品物ができて溜まってくると、園生活の中でお店屋さんごっこが始まる。できた品物を並べて展示し、売り買いをして買い物ごっこを楽しむ。その中で保育者は子ども達に「何が足りない？」と問いかける。子ども達は買い物ごっこを体験してみて気付い

たことを伝え合い、話し合う。「〇〇の品物の数が足りない」「看板がない」「〇〇の品物が壊れてしまった」等という具合になる。実際に体験することでトラブル（事件）が発生する。そこでまた、保育者も交えて子ども達同士で話し合い、「〇〇の作品を増やそう」「看板を作ろう」「〇〇の品物の修理をしよう」等の結論と考え（解決方法）が導き出される。そして子ども達の品物づくり、お店作りはさらに広がりを持って展開する。子ども達は自分の所属するお店（グループ）以外の品物が足りない場合でも、役割分担をしながらそのお店（グループ）の品物づくりと一緒に製作する。こうした心持がY園では自然に現れている。また、看板はダンボールに絵の具で着色をする等して製作する。絵具や筆、水入れ、下敷き用の新聞紙等の準備は保育者の方で行うが、着色や製作は子ども達が自分たちで行う。

保育に参加させていただく中で、Y園ではベテラン保育者による問いかけが非常に優れていると筆者には感じられた。子ども達に次々と話しかけ、問いかけることで考えるきっかけを与えている。保育者からは「〇〇しなさい」等の言葉はない。子どもはその時々々の状況を自分自身で振り返り、自分なりの考えを持って、製作を通してその考えを試してみる。保育者は問いかけた後に、子どもがすぐに返答できなくても、途中で上手に間を取る等をして驚くほど忍耐強く子どもの反応や返事を待ち、見守っていた。すぐに返答が返ってこない幼児特有の時間や会話、思考のテンポだと思われるが、子どもは急き立てられることなく自分のペースで保育者に話をすることができ、受け止めてもらえるので、安心して自分なりの考えを話すことができていた様子だった。子ども達はどの子も生き生きと取り組んでおり、自信に溢れた表情が見られた。ベテラン保育者は、「子どもの思いやイメージと保育者の思いやイメージを共有（一致）させるところに気を付けて保育に取り組んでいる」と述べておられた。「誰が、何を作りたい、したいと思っているのかを知ることが、非常に重要なポイントになる」のである。「子どもにも学びになり、保育者にも学びになる」ことを、毎回の「お店屋さんごっこ」を通してベテラン保育者は実感しておられた。

また、年長組では中堅保育者が子ども達とピザ屋さん等に取り組んでおられた。大きな窯をダンボールや保育室の遊具（ゲームボックス等）で作り、さらに柄の長いピザピールも自分達で作るといふ、本格的な「お店屋さんごっこ」である。子ども達が普段の日常生活の中で、家族と一緒にピザ屋さんに行っているという

現代のライフスタイルが「お店屋さんごっこ」にも反映されている。品物（作品）であるピザも、明るく彩りの良い色画用紙等で、コラージュの方法等を活用して、センスの良さを感じさせるイメージで製作されていた。

Y園のお店屋さんごっこは、製作をねらいとした園行事だが、さながら大学や高校の文化祭やオープンキャンパスと同じような趣きを感じられた。自分の幼い子どものために保護者が一緒に本腰を入れて参加している分、より迫力のある行事になっている。各クラスには多様な子どもが在籍していると考えられるが、ベテラン保育者と中堅・若手の保育者がバランス良く配置され、緊密に連携をとりながら、どの子ども達もその子なりに楽しく参加し、取り組めるように暖かく見守り、援助や配慮を行っている様子を感じられた。

② 年中組

年中組の子ども達は、年長組と比べると、まだ見通しが持っていない様子である。担任の中堅保育者やベテラン保育者によるお話や声かけによって、目の前の物事に取り組んでいる。年中組でもお店屋さん会議（話し合い）が行われ、子どもたちの興味や関心に応じて、お店づくりや品物づくりが行われている。年中組では、洋服屋さん、カチューシャ屋さん、マック（マクドナルド。ハンバーガー屋さん）、カメラ屋さん、お花屋さん、ロボット屋さん、カメラ屋さん、果物屋さん、メガネ屋さん、動物屋さん、靴下屋さん、宝石屋さん、ゲーム屋さん、携帯ショップ、水族館、病院、アイス屋さん、レストラン、ドーナツ屋さん、リボン屋さん等、多くのお店が候補としてあがっていた。微笑ましいものも含まれている。年中組では話し合いによって、この中で主に、お花屋さん、リボン屋さん、レストラン、水族館、靴下屋さん、動物屋さん、等のお店に絞り込まれていた。こうした子ども達の思いやイメージをもとに、保育者は色画用紙や、お洒落なラッピング用の素材等をはじめ、色彩豊かで製作しやすい多様な材料を用意して、いつでも子ども達が手に取って製作できるように整理しておられた。コロナ過以降の感染症対策や衛生面の配慮等も浸透している様子で、素材や用具の準備や取扱いについては清潔感が感じられた。またY園では、例えば「トイレットペーパーの芯がない」と保護者に投げかけると、保護者も協力してくれて十分な数の素材を集めることもできるということであった。

年中組の子ども達は年長組の子ども達よりも、話し

合いや製作等に集中して取り組める時間が短い様子だった。子ども達のタイプにもよるのかもしれないが、この場合は発達や年齢によるものだと考えられた。保育者は、こうした子ども達の状態を敏感に読み取っていた。話し合いや製作を進める中で、子ども達の集中力や関心が薄れてきた様子を察知して、決して無理をさせることなく、「じゃあ好きな遊びをしようか?」「外遊びにしようか?」等と声をかけながら、子ども達の思いを汲み取っていた。強制して製作をする訳ではなく、子ども達が主体的に取り組めるように、子ども達の興味や関心を拾い、子ども達の反応を即座に取り入れることに保育者は意識を集中させている様子だった。中堅保育者は、「お店屋さんごっこは全体行事であるが、Y園は子どもが好きな遊びをすることを大切にしている園だ」と述べておられた。そして、「朝の時間や好きな遊びの時間を長くとり、集団遊びを確保しながら一人一人の子どもの興味をどれだけ引き出すことができるのかが大変なところだ」と保育を振り返り、保育の意図と保育者自身の援助やねらいを考察し、子ども理解を深めておられた。

③ 年少組

年少組は初めての「お店屋さんごっこ」の体験となる。年間の製作活動の集大成として、様々な材料や素材と関わる体験、用具の取扱い、作る楽しさを味わう、ごっこ遊びを楽しむ、等の基本的な保育のねらいや内容を体験する。担任である新人保育者によると、最初は品物づくりの前段階として「素材遊び」を採り入れておられた。様々な身の回りの材料を用意して、子ども達の前にできるだけ多くの素材を出すことを心掛ける。素材の出し方として気を付けていることは、切ったり貼ったり作ったりする時に加工しやすい材料から出すことである。はさみやセロテープを基本的に使用して用具（道具）の使い方や各素材の特性等を体験する。少しずつ慣れてきたところで、少し厚めの紙類や、硬くて加工しにくい素材を順々に出していく。プラスチック類の材料は最後の方で出す。多様な素材と関わることで、ものを作る意識も育むようにする。しかし、年少組は興味や関心が移ろいやすいこともあり、集中して取り組む時間は短くなるため、こうした素材遊びは小刻みに行うことになる。そのうちに年中組や年長組の子ども達が、ある程度の品物を完成させて、買い物ごっこを始める。その姿を見ながら自分たちも見よう見まねで参加し、体験を通して少しずつお店屋さんごっこを理解するようになる。

新人保育者は保育歴1年半という話だったが、子どもの姿に応じて、落ち着いてしっかりと保育を展開しておられた。年少組にはベテラン保育者も配置されていたが、Y園では新人保育者とベテラン保育者がバランス良く配属され、新人保育者も伸び伸びと自分自身の長所を発揮している様子が伺えた。お店屋さんごっこは全体行事でもあるため、園全体の保育や進捗状況がどの保育者にも共有されている。各保育者はその理解に基づいて相互に連携を図りながら保育を展開しておられた。Y園では基本的には毎日、各保育者がその日の保育の様子について相互に連絡を取りあっている。そして週に2日ほどは終礼等の時間で全体に対して報告したり、適宜、学年会議を開催したりする等をして、園長や主任と各担任とで話し合う時間が設けられている。

(5)「お店屋さんごっこ」の当日と保護者

お店屋さんごっこの当日は、Y園は非常に多くの人で溢れていた。二つの駐車場は全て埋まり、それでもスペースが足りない状態だった。各クラスの保育室は、園児とその保護者で溢れ、担任の保育者はその園児と保育者に向かって、お店屋さんごっこの説明や紹介を行っていた。そして定刻になると、園舎内の各スピーカーから「これからお店屋さんごっこを始めます」という放送が入り、それをきっかけにして、子どもと保護者が一体となったお店屋さんごっこが始まった。溢れるほどの多くの参加者が品物を並べて販売し、その品物が次々と園児と保護者によって購入されていった。お店屋さんごっこで使用するお金は勿論、子ども達が作った手作りのお金である。販売者と購入者は事前に役割分担が決められており、時間ごとにローテーションをする形となっていた。保護者は自分の子どものためでもあり、本腰を入れて子ども達の品物を販売して回り、そして購入して回る。その様子からは熱気が感じられ、普段の園生活で行われている子ども達によるお店屋さんごっことは全く異なる光景だった。お店屋さんごっこの本番当日だけに保育参加をしていたら、Y園の保育の本質に触れることは全くできなかったと考えられる。この本番当日の迫力は、普段のY園の園生活の様子と、普段のY園の保護者会等の様子が、おそらく一つになった状態だったのだろう。子どものために保育を支える保護者の存在の大きさと思いの強さを改めて感じさせられた。

5. Y園と保護者と保育参加

(1) Y園と保護者

Y園の保育に参加させていただいて強く感じたことは、保護者や地域の方々との結び付きが強いということである。Y園では、教育及び保育の活動に対する保護者の参加には、お誕生会、遠足、キャンプ、プールの準備、夏祭り、たけのこの収穫、あさがおの種まき、田植え・稲刈り・脱穀精米・収穫、サツマイモの苗植え・収穫、タマネギの収穫、ジャガイモの収穫、ニンジン収穫、カレーパーティー、里芋の収穫、大根の収穫、豚汁パーティー、親子わらべうた、等がある。その他にも定期的に自由参観日が設けられている。園や地域によって交流や取り組みのあり方は様々だと考えられるが、Y園における保護者との交流や繋がりは非常に強く感じられた。

(2) Y園の干し柿づくり

お店屋さんごっこは継続性のある行事だが、その間にも並行して園生活では自然体験や食育、異年齢交流等も行われている。その中でY園では「干し柿づくり」の日があり、筆者も参加させていただく機会に恵まれた。柿はY園で収穫した柿である。この自然体験にも有志の保護者の方々が参加しておられた。Y園にはこうした「干し柿づくり」や「カレーパーティー」「とん汁パーティー」「親子遠足」「休日参観」「保育自由参観」等の保護者が保育に参加できる活動が定期的に数多く計画されている。保護者の参加は任意であるが、Y園では意欲的に保育に参加する保護者の数が非常に多い様子がここでも感じられた。

柿には甘柿と渋柿がある。渋柿も干して干し柿にすると甘くておいしい柿になる。そうしたお話を、各クラス担任の保育者が『カキの絵本⁽⁵⁾』の読み聞かせを交えながら、事前に子ども達と干し柿づくりのイメージや理解を共有していた。絵本の内容はかなり詳細な内容で、大人でも参考になる絵本である。子ども達はその絵本の内容をかなり正確に覚えていて、「柿をお湯に入れてから干すんだよ」等とやや難解と思われるその内容を口々に筆者にも教えてくれた。まだ4歳児・年中組の子ども達であり、その理解や知識は一時的なものとも思われるが、自分達なりの理解や納得をしている様子が感じられた。

その後、園舎のホールで実際に干し柿づくりを体験した。干し柿づくりのために必要な用具や材料は、園の先生方と有志の保護者の方々によって準備されてい

た。干し柿づくりでは、枝付きの柿の皮をむき、葉を細長く撚った紐で二つの柿の両端を結ぶ。そして両端に柿がぶら下がった状態で紐の中央を手に持ち、熱湯に一瞬通す。こうすることで殺菌効果が得られる。あとは、軒下の風通しの良い場所に吊るして干す。さらに霧吹きに焼酎を適量入れて、柿全体に吹きかけてカビ対策を施す。干し柿づくりは、事前の準備や事後の後片付けは大変だが、柿を持って熱湯に通すところは、保育者や保護者の見守る中で注意して行えば幼児でも楽しく取り組むことができる。Y 園ではこの干し柿づくりでも、保護者と園の先生方が協力して、楽しみながら子どもの育ちと保育を支えておられた。

6. 子どもの姿と保育実践に基づく造形表現の考察

(1) 幼児教育・保育の実践と造形表現のあり方と差異

製作をねらいとした園行事「お店屋さんごっこ」は、品物作り（製作）と買い物ごっこ（ごっこ遊び）の二つのねらいや要素が一体化した園行事（遊び、保育内容）である。子どもの年齢や発達、体験に応じた話し合いや製作、用具や材料（素材）の体験及び取扱い、等が主な内容となる。Y 園のお店屋さんごっこでは、製作したものを「作品」としてよりも、「品物」として捉えている。お店屋さんごっこのために製作しているものだから「品物」だという自然な理解である。この「品物」≡「作品」という捉え方の差異が、幼児教育・保育と美術や美術教育、造形表現に対するあり方との差異に繋がっているように感じられた。美術や美術教育では、作者が体験したり感じたり考えたりしたことを試行錯誤して表現することで作品が完成する。作品が完成したことで製作・表現活動が完結すると見なす場合と、完成した作品を美術館や画廊、園や学校等の展示空間で展示をすることによって製作・表現活動が完結すると捉える場合とがある。美術や美術教育では、幼児教育・保育の実践よりも、作者の考えやイメージを全て作品に込めて製作する。この段階で、ほぼ表現は完結していることが多い。作品を展示する場合は、展示空間を作品で展示・表現することになるので、表現活動として捉えることもできるが、インスタレーションのような表現方法や現代美術の作品等でない場合は、通常、約 8 割は作品の中に表現が詰まっていると見なすことの方が多い。幼児教育・保育の実践では、やはり子どもが体験したり感じたり考えたりしたことを試行錯誤して表現することで作品が完成する。しかし、

その作品にその子どもの表現が全て詰まっているとは見なさないことの方が多いと思われる。その作品に付随して、ドキュメンテーションのように、その子どもの思いやつぶやき、成長や発達、園での生活や保育の様子や過程等が作品と一緒に提示され、紹介される。また、作品が完成しても表現活動がその段階で完結したと見なすことも少ないようである。幼児の作った作品を活用して、さらに次の遊びに展開して楽しむことの方が一般的である。それは Y 園のお店屋さんごっこでも見られたように、幼児の年齢や発達に応じた集中力や持続力の問題にも要因の一つがあると考えられる。こうした手立ては子どもの姿に応じて保育を工夫改善してきた保育者の実践と蓄積の結果でもあるのだろう。

完成した作品を展示して鑑賞する活動は、比較的、静的な活動である。一定年齢以上の青少年や大人なら落ち着いて過ごすことができるので良いかもしれないが、じっとしていることの方が困難に感じられる幼児の場合には、もっと活動的・動的な活動の方が取り組みやすいのかもしれない。その点、絵本の読み聞かせ等は、お話を聞きながら画面やページが変わっていくので、幼児の鑑賞にも適合しやすいのだろう。こうした部分が、お店屋さんごっこの「品物」と「作品」の差異にも表れていると考えられる。園で開催される作品展や表現展等の展示のあり方も重要だと考えられるが、子どもの姿や幼児教育・保育の実践に基づいて造形表現について考える場合は、こうした動的な遊びに繋げたり、展開したりする方法について考えてみることも必要だと感じている。こうした視点から見ると、Y 園の「お店屋さんごっこ」と「品物づくり」は、園生活の中で、子どもの姿や年齢・発達に応じて無理なく一体的に取り組まれた優れた幼児教育・保育の実践例だと考えることができる。

(2) 造形表現における「単発的な遊び」と「継続的な遊び」

① 造形表現における「単発的な遊び」

造形表現には、大別すると「単発的な遊び」と「継続的な遊び」が存在する。「単発的な遊び」は、好きな遊びや隙間の時間、あるいは実習生による模擬保育や責任実習等で取り組まれることが多い。「単発的な遊び」は、日案や内容別部分指導案を通じて造形表現の基本的なねらいや手順、構成等が掴みやすい。

② 造形表現における「継続的な遊び」

製作や造形表現に関する保育は、普段の園生活を通

じて、比較的長期にわたる「継続的な遊び」として展開されることが多い。Y園の「お店屋さんごっこ」は園の全体行事であり、10月～12月という比較的長期にわたって展開される「継続的な遊び」である。子どもの姿や園生活を踏まえて長期の指導計画や日案に基づきながら保育者は日々の保育を考える。Y園では保育者が毎日の終礼や学年会議等で緊密に情報交換や進捗状況を共有して検討を重ねておられた。

7. 全体的な計画及び指導計画と造形表現による保育実践の考察

(1) 全体的な計画及び指導計画の作成と評価・改善

「幼保連携型認定こども園 教育・保育要領」には、「教育及び保育の内容並びに子育ての支援等に関する全体的な計画」の作成等について、各認定こども園において、教育基本法、児童福祉法、認定こども園法、その他の法令並びに「教育・保育要領」の示すところに従い、教育と保育を一体的に提供するため、創意工夫を生かし、園児の心身の発達と認定こども園、家庭及び地域の実態に即応した教育及び保育の内容並びに子育ての支援に関する「全体的な計画」を作成することが示されている⁽⁶⁾。そして、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえて「全体的な計画」を作成し、その実施状況を評価して改善を図り、組織的かつ計画的に教育及び保育活動の質の向上を図ることに努めることが求められている。

保育教諭等は、あらかじめ園児の発達に必要な経験を見通し、各時期の発達の特性を踏まえつつ、「全体的な計画」に沿った指導計画を立てて継続的な指導を行うことが必要である。さらに、具体的な指導においては、あらかじめ立てた計画を念頭に置きながら、それぞれの実情に応じて柔軟な指導をすることが求められている⁽⁷⁾。認定こども園で実際に指導を行うためには、各園における「全体的な計画」に基づいて、「内容」「配慮事項」「環境の構成」「保育教諭等の援助」等の指導内容や方法を明らかにする。指導計画は「全体的な計画」を具体化したのである。指導計画は一つの仮説であり、実際に展開される生活に応じて常に改善されるものである。

認定こども園において教育及び保育を行う際に必要なことは、園児一人一人に対する理解を深めることである。園児一人一人の発達の理解に基づいた評価の実施に当たっては、次の通りである⁽⁸⁾。

「指導の過程を振り返りながら園児の理解を進め、園

児一人一人のよさや可能性などを把握し、指導の改善に生かすようにすること。その際、他の園児との比較や一定の基準に対する達成度についての評価によって捉えるものではないことに留意すること。」

「評価の妥当性や信頼性が高められるよう創意工夫を行い、組織的かつ計画的な取組を推進するとともに、次年度又は小学校等にその内容が適切に引き継がれるようにすること。」

(2) 長期の指導計画と短期の指導計画による造形表現における継続的な遊びの考察

今回のY園の製作をねらいとした園行事・お店屋さんごっこのように、継続的な遊びのある保育は、「全体的な計画」を踏まえて、年、学期、月、発達の時期、等で区分される長期の指導計画に位置付けられる。そして、週案や日案、内容別部分指導案、等の短期の指導計画で一層具体化される。

指導計画の作成の手順や形式には一定のものはないが、例えば、幼児教育学者・大岩みちのによると、週案は「休日で区切られる保育の流れをどう捉えて、次の週に繋げるのかという判断をし、遊びや活動、生活に見通しを持つこと」が作成のポイントとなる⁽⁹⁾。子ども達の姿から興味・関心の度合いを計り、保育者の「ねがい」や「ねらい」を考え合わせて計画する。園で行われる様々な行事もあるため、行事への取り組みを考慮した週案を作成する必要もある。行事には、子どもの遊びや活動のまとまりとしての行事と、あらかじめ決められている日に向けて、次第に気持ちを高めていく行事がある。1人ひとり、グループ、クラス全体の子どもの遊びや活動、生活に対する保育者の受け止め方によっても週案は影響を受けることがある。

日案は「明日の保育をイメージしながら、1日の指導計画をもっとも具体的に考えるプラン」である⁽¹⁰⁾。具体的に考えるために、子ども達・環境・保育を観察する、関わりながらわかろうとする、記録する、話し合って理解する、等が求められる。

こうした考察や「教育・保育要領」を踏まえて、造形表現について考えてみる。例えば、日案では「子どもの姿」「ねらい」「主活動の内容」「主活動の準備」「時間」「環境構成」「子どもの活動」「保育者の援助・留意点」等の項目を記入する。造形表現の内容別部分指導案の作成では、「題材名」「保育のねらい」「事前・事後の準備」「安全面の配慮事項」「時間」「環境構成」「子どもの活動」「保育者の援助・留意点」「導入」「展開」「まとめ（終末）」「振り返り・考察」等、造形表現や製

作に関わる具体的な項目から考える。

ここで保育実践に基づいて造形表現の場合をさらに具体的に考えてみると、発想や構想について、話し合いを含めて考えたり、イメージしたり、共有したりする場合の「導入」と、具体的な製作の方法や手順等に関する「導入」に整理して考えた方が理解しやすいと考えられる。また、「展開」も同様に、製作や作品を完成させることに重点を置く「展開」と、完成した作品を活用する等して多様な遊びに繋がったりする「展開」に整理して考えてみると、より保育実践に即した実際の「展開」を考えることができると思われる。

内容別部分指導案の作成を通して、継続的な遊びのある造形表現について考える際は、長期の指導計画を見ながら、子どもの姿や製作の節目にあわせて、製作や造形表現に関する内容別部分指導案を作成し、保育の構想を考えてみることも、子どもを理解する一つの具体的な方法として有効だと考えられる。そうした際に、例えば小学校図画工作の学習指導案で記入されることがある「本時と指導計画」のような項目や一覧表を設け、簡潔に記入して考察すると、長期の指導計画とその時の進捗状況とを整理して把握することにも役立つと思われる。内容別部分指導案の作成を通して、このような形で、長期の指導計画と短期の指導計画の両方から、実践に基づいて具体的に造形表現について考えてみることも、保育について考える一つの有効な方法だと考えている。

『教育・保育要領解説』で示されている「活動の展開と保育教諭等の援助」では、「園児の行う具体的な活動は、生活の流れの中で様々に変化するものであることに留意し、園児が望ましい方向に向かって自ら活動を展開していくことができるよう必要な援助をすること」とあり、園児の興味や関心に基づく主体的な活動が重視されている⁽¹¹⁾。保育教諭等は、園児の興味や関心に基づく主体的な活動の展開に応じて柔軟に考え、「その活動が適当か」「保育教諭等の期待した方向に向かっていくか」「そこに関わる園児がどのような体験を積み重ねているのか」「その体験が園児一人一人にとって充実していて発達を促すことにつながっているのか」等を把握して園児の活動を理解し、それに基づいて必要な援助を重ね、状況に応じて多様に関わることが求められている。活動の展開は保育教諭等の援助と一体として捉えられている。園児の発想や環境の変化、あるいは他の園児が関わることによって、予想を超えた展開になる場合もある。このような場合には、その活動の展開の面白さを大切にしつつ、そこで園児がどのよう

な体験を積み重ねているのか読み取りながら必要な援助をしなければならない。認定こども園における指導計画は、「園児の実態及び園児を取り巻く状況の変化などに即して指導の過程についての評価を適切に行い、常に指導計画の改善を図るものとする」ことが『教育・保育要領』において求められている⁽¹²⁾。

8. 園で行う子育て支援と造形表現に関する考察

(1) 子どもの育ちを支える保育者と保護者の存在

製作をねらいとした園行事「お店屋さんごっこ」は、園生活の中で園児だけで取り組む場合と、本番当日に保護者も参加して取り組む場合とで状況が大きく異なっていた。園生活の中で園児だけで取り組む「お店屋さんごっこ」は、「品物づくり（製作）」と「買い物ごっこ（ごっこ遊び）」を二つのねらいとする園行事（遊び、保育内容）である。この場合は、子どもの年齢や発達、体験に応じた話し合い、製作、用具や素材（材料）の体験および取扱い等が重要な内容となっている。一方、本番当日に保護者も参加して取り組むお店屋さんごっこは、子どもを中心に置きながら保護者が活発に活動していた。子どもは保護者に支えられ、見守られながらお店屋さんごっこに参加している。それは前述の「干し柿づくり」の活動でも同様である。保護者は実際に保育に参加し、その場に身を置いて自分自身で確かめることで、子どもの育ちと子どもが普段置かれている保育の環境を確認することができ、安心感を得ることができるのだろう。Y 園の製作をねらいとした園行事「お店屋さんごっこ」は、園生活における保育と、園で行う子育て支援における保護者の参加とが一体となっている。

(2) 園が行う子育て支援

現在、『教育・保育要領解説⁽¹³⁾』では、「子育ての支援」や「保護者支援」、「教育及び保育における活動に対する保護者の積極的な参加」等の働き掛けや環境づくりが望まれている。保護者に対する子育ての支援は、「子どもの最善の利益」を踏まえ、一人一人の子どもの存在を尊重し、子どもの立場に立った子育ての支援を行う必要がある。子育て仲間や子育てサークルの形成をはじめ、園内外に子育てについて気軽に話すことのできる人間関係や雰囲気醸成することが期待されている。保育者は専門性を生かして住民と温かい繋がりを深め、保護者の子育てに関する力の向上に寄与し、

子育ての経験の継承につながる保育が求められている。

園で行う保育者による子育て支援では、基本的には子どもの発達や保護者の養育力の向上、自主的な活動の視点を持った保護者同士の交流や相互支援、等を通して、保護者が子どもの成長に気付き、子育ての喜びを感じられるように務めることが大切にされている。Y園の全体行事「お店屋さんごっこ」も保護者参観日とあわせて実施することが計画されている。保護者の参観や参加の機会を提供し、他の子どもや保護者と触れ合うことで保護者が自分の子どもの育ちを客観的に捉えることにも繋がり、保育者が子どもを深く理解する視点を伝えたり、その実践を示したりすることも、保護者にとっては大きな支援になっている。

中村章啓は保育者の立場から保育所における家庭や地域との連携の具体的な例として、Y園とは別の事例だが、同様にお店屋さんごっこの実践を例にあげている⁽¹⁴⁾。ここでのお店屋さんごっこは保護者に向けてお店屋さんを開くという内容である。中村によると、子ども達がお店を開くためには、何らかのイメージを子ども達が持っている必要がある。お店屋さんに限らず、子ども達が夢中になって遊び込むためには、家庭や地域での経験が大きく影響する。中村は、園が家庭や地域と連携することを通じて行う支援には、①子どもに対する支援、②保護者に対する支援、③ネットワーク構築に関する支援の三つに大別できると述べている⁽¹⁵⁾。園と家庭が連携する目的は、子どもの健やかな育ちと豊かな学びを保障することにある。保護者との相互理解に基づき、就労と子育ての両立等の支援、育児に関する支援等が主なものとなる。またネットワークの支援では、「園庭開放」「育児相談」「子育て講演会」「絵本展」「おもちゃ展」「カフェの常設」「地域と協力したマルシェ（市場）の定期開催」、写真等を活用した「ドキュメンテーションによる情報共有」「保育参加を通じた保護者とのパートナーシップ」「園のサポーターとしての保護者会活動」等の取り組みが紹介されている。「園外散歩」や「児童公園等をはじめとする公共の施設の利用」「交通機関の利用」等の地域との連携も保育の質を高めることに繋がっている。

その他、例えば佐藤純子は家族社会学の視点から、保育者（保育士）の行う子育て支援の実際について、「送迎時の丁寧な対応」「個人面談」「保護者向け講座の実施」「父親懇談会」「出会い保育」等の他、園が行う地域の子育て支援の具体例として、「地域の子育てを支援するイベントの実施」「ふれあい体験保育」「ふれあい運動会」「児童館との連携」「おもちゃの広場」等を

紹介している⁽¹⁶⁾。

(3) 造形表現と親子参加型の行事

Y園の園行事「お店屋さんごっこ」は製作をねらいとした園行事という点で特徴があるが、保護者や家庭との連携という子育て支援の要素を併せ持つ保育である。保育内容「表現」の視点から園行事について考察した小田久美子と新開よしみは、日本の保育環境の特徴として「地域による見守り」「季節を感じる」「伝統と文化」「災害と安全」をあげ、園生活の中に行事の形で様々な浸透していると指摘している⁽¹⁷⁾。行事は『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『教育・保育要領』の「総則」「指導計画の作成上の留意事項」「領域環境」に記述されている。保育内容の5領域は、当然ながら、遊びを通して総合的に指導される。その中で小田と新開は表現系行事として「お遊戯会」「生活発表会」「音楽会」「作品展」「運動会」等をあげている。地域や保護者の連携という面からも行事は大きな役割を果たしている。例えば、直井玲子は劇遊びをはじめとする表現に関わる遊びや生活の過程を写真等の資料で記録しながらドキュメンテーションとして伝える保育実践を紹介している⁽¹⁸⁾。従来の表現に関する行事は、発表会の要素に重点が置かれていたと思われるが、現在は子どもの育ちや保護者および家庭との連携という子育て支援の視点から捉え、重点を置く展開が多くなっていると思われる。

親子参加型の行事は家庭では味わえないこと（経験）を親子で共有すると共に親子や保護者同士の交流の場にもなる。保育者にとっては、保護者との関係を深め、園では見られない親子の関わりを理解する機会にもなる。園生活の中で子どもの内側から湧いてくる表現への意欲、イメージや構想、取り組みたい、実現したいという思いは「表現力の基礎」や「学びに向かう力」という資質・能力が育まれつつあることの現れとして見ることができる。保育者は可能な限りその子どもの思いが実現できるように寄り添い、見守りながら援助することが大切となる⁽¹⁹⁾。

(4) 園で行う子育て支援に寄与する造形表現のあり方の課題と可能性

本研究を通じて、保護者と相互理解を図り、子育てを自ら実践する力の向上や、子育ての経験の継承、保護者の多様化した教育及び保育の需要に応じた事業等、園で行う保育や子育て支援に寄与する造形表現の多様なあり方について考察することも必要であり、大きな

課題であると感じた。感性と表現に関する領域「表現」は「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」ことであるが⁽²⁰⁾、「子どもに対する支援」「保護者に対する支援」「ネットワークの構築」等の例のような具体的な問題に寄与する造形表現に関わる内容やあり方について、工夫して考えてみることも大切だと思われる。乳幼児教育・保育に関わる美術教育研究では、ワークショップや製作・鑑賞活動、絵画・造形教室、作品展・表現展、各種展覧会・発表会、等の形で取り組みられ、その成果の蓄積が図られている。ドキュメンテーションのように、造形表現や製作の過程、作品・成果物、等を通して、子どもの育ちを理解し共有する取り組みも広く行われている。こうした造形表現に関わる行事やイベントは、園児や保護者、保育者等の様々な交流の機会にもなっている。

造形表現は、子どもの作品や成果物を通して、入園から年度末や卒園までの子どもの成長や発達の過程をたどり、理解することもできる。現在は画像や動画の活用も可能な時代であり、子どもの育ちや成長の軌跡の可視化にもなる。保育の成果を伝える資料や根拠にも繋がる。何か特別に新しいことをするというのではないが、園で行う保育や子育て支援において、育児や発達に関する相談や支援の一環として、造形表現に関わる内容や方法を、子どもや保護者に寄り添いながら保育者が工夫して伝えることも、子どもの成長を共に喜び、理解する方法の一つになるかもしれないと考える。こうした造形表現のあり方や内容のより一層の工夫や充実、蓄積も重要だと考えている。

9. おわりに

～Y園の製作をねらいとした園行事と保護者の保育参加から学ぶこと～

Y園のお店屋さんごっこは、創立当初から現在まで改変を繰り返しながら、その時々保育者や園児、保護者らが工夫改善を行いながら受け継がれてきた。製作をねらいとした園行事・お店屋さんごっこは、「品物づくり（製作）」と「買い物ごっこ（ごっこ遊び）」によって成り立っている。さらに「園生活における園児主体のお店屋さんごっこ」と「本番当日の保護者参観における保護者参加型の保育」が一体となって展開されている。園で行う教育・保育と子育て支援の内容を併せ持つ園行事である。お店屋さんごっこは、年間指導計画の中でも全体行事の大きな柱の一つとして位置

付けられている。子どもの興味や関心に基づいて子どもが主体的に取り組むことができる活動、継続的な遊び、話し合い、イメージや目標の共有、製作、ごっこ遊び、試行錯誤、創意工夫、学びあい、体験を通じた理解、等が園生活の中で無理なく一体的に取り組まれている。保育者は子どもの思いや姿を敏感に読み取り、子どもの年齢や発達に応じて判断と対応や援助を繰り返ししながら、子どもと向き合っておられた。比較的若い保育者は子どもに寄り添う中で、時には迷い、課題を抱える様子も伺えたが、ベテランの保育者に見守られ、保護者も含めて相互に意志の疎通を図りながら、ひたむきに保育に取り組んでおられた。

本論では、Y園の保育を手がかりにして、園生活の中で無理なく一体的に展開する幼児教育・保育としての造形表現（領域表現）の一つのあり方を明らかにすることを試みた。今回のように良質な保育実践に基づく内容や指導法の考察と蓄積は、保育者養成や造形表現および教育・保育の質の向上と充実に貢献すると考えている。

引用文献

- (1) 津守真『子どもの世界をどうみるか 行為とその意味』NHK 出版、1987
- (2) 安部富士男『幼児に土と太陽を 畑づくりから造形活動へ』新読書社、2002
- (3) 林健造『幼児の絵と心 子どもからあなたへのメッセージ』教育出版、1987
林健造、岡田愨吾『保育の中の造形表現 豊かな感性を育てる実践と援助』サクラクレパス、1992
林健造『異文化としての幼児画 あなたへのメッセージの読みとり方』フレーベル館、2008
- (4) 認定こども園 Y 園「園案内 令和 4 年度」より久保木作成。
- (5) まつむら ひろゆき／編集、きくち ひでお／イラスト『カキの絵本 そだててあそぼう 30』農山漁村文化協会、2001
- (6) 内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園 教育・保育要領解説 平成 30 年 3 月』フレーベル館、2018、p.68
- (7) 前掲書、p.87 ～ p.124
- (8) 前掲書、p.115 ～ p.118
- (9) 大岩みちの「第 4 章 短期指導計画の実際」岸井勇雄・無藤隆・湯川秀樹／監修、小笠原圭、卜田真一郎／編著『保育の計画と方法』同文書院、2003、

p.78 ～ 79

- (10) 前掲書
- (11) 『幼保連携型認定こども園 教育・保育要領解説 平成 30 年 3 月』 前掲書、p.93
- (12) 前掲書
- (13) 前掲書、p.348 ～ p.371
- (14) 中村章啓「家庭や地域との連携をふまえた保育」
渡邊英則・大豆生田啓友／編著『保育内容総論』
ミネルヴァ書房、2020、p.155 ～ p.170、所収。
- (15) 前掲書
- (16) 佐藤純子「保育士の行う子育て支援とその実際」
および「地域の子育て支援に対する支援」 原信
夫・松倉佳子・佐藤ちひろ／編著『子育て支援
「子どもが育つ」をともに支える』北樹出版、2020、
p.54 ～ p.71、所収。
- (17) 小田久美子、新開よしみ、直井玲子「地域・行事
における表現①行事と保育、②日常の保育と往
還、③地域・行事とつながる表現活動」吉永早
苗／編著『子どもの活動が広がる・深まる 保育内
容「表現」』中央法規出版、2022、p.119 ～ p.152、
所収。
- (18) 前掲書
- (19) 前掲書
- (20) 「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携
型認定こども園 教育・保育要領」（いずれも平成
30 年 3 月）

謝辞

本研究に快くご協力くださいました認定こども園・Y 園の園長先生をはじめ、園の子ども達、保護者の皆様、保育者の先生方、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

付記

本研究は「敬愛短期大学研究倫理規定」に基づいて実施した。

本研究は「2023 年度千葉敬愛短期大学（現・敬愛短期大学）プロジェクト研究費」の助成を受けて実施した研究の一環である。